

---

# 消えない十六年の傷

會田 雅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

消えない十六年の傷

### 【Nコード】

N3601X

### 【作者名】

會田 雅

### 【あらすじ】

幼い頃に自らの手で総てを失った女、リンデイス。彼女を剣術の師として尊敬する少女がひょんなことからエルリック兄弟と出会ったがため、彼等に協力することとなる最強の旅人、リンデイスの物語。

## prologue

たらりと頬を流れ落ちる生暖かい液体は、とても鉄臭かったのを覚えている。目の前で倒れている骸ひとがいた。その骸ひとはもう動くことが出来ないのは脳漿シヤウジヤウを失っているのだから当然かと結論づけ、倭刀に付着した液体を振り払った。

そう、これは私の罪をさいなむように何度も見せつけられる過去を語る忌々しい夢なのだ。

ならば次に何が起こるのか大体、いや確実に予想がつく。

がさつと背後で物音がして私はとっさに振り向きその刹那、相手のナイフが私の脳天から右目を通り右頬の真ん中にかけて顔を浅くだが確実に切り裂く。

利き目を失い正しい方向感覚を失った私は痛みよりショックが大きかったのかむしゃらに倭刀を振り回す。

三回ほど刃先がナイフをかすった後私は確かな手応えを感じ、瞳孔が限界まで開く。

砂粒のような鮮血が目の前でスローモーションみたいに形を変えながら宙を舞うのをはつきりと覚えている。

飛礫のみたく感じられる雨の中そこには二つの屍と一つの生きた個体が存在していた。

一つは不意打ちに失敗し、こめかみに穴を開ける。

もう一つはすかさず一つ目の命を一瞬にして奪った生きた個体の右目を潰すがソレが仇となり結果彼女の冷静な判断力を奪い首から上を失った。

それは昔、私が飼っていた鳥が鳥籠の中で自ら生み、割った卵の真ん中で鳴いていた光景と似通ったモノがあった。

私の顔面に張り付いていた表情は鳥とは違って人間のみが見せることを許された狂気のそれであったのだが。



楽しげに響く小鳥たちの声に重い臉を上げる。ああ、十数年前の夢を見るのは何度目だろう。未だ走馬燈みたいに鮮明に巡る記憶を洗い流し去ろうとするように髪をくしゃくしゃと乱暴に整えた。

これから出発の身支度を調えようとしている女性、リンデイス・フィオレはこれか血と硝煙のらせんに再び引きずり込まれていくことになるのを彼女はまだ知らない。

prologue (後書き)

微妙にグロかったらすみません…

## 出会い

イーストシティにて。

「あゝっ全くピーチクパーチクうるせえんだよ朝鳥共が！焼き鳥にするぞ！」

今日はもつと寝ようと朝ぐっすり八時頃までベッドの中にいようと  
していたのに小鳥たちによって起こされてしまい今現在ご立腹の鋼  
の錬金術師、エドワード・エルリックは一人町中で騒いでいた。  
無論その怒りの矛先は責務を果たした小鳥たちだ。

「まあまあ兄さん落ち着いて…」

それを宥めるのは弟、アルフォンス・エルリックの役目。  
なだ

こんな毎日のように繰り返られる茶番に意も介さぬ横やりが入  
った。

彼等に一人の男性がぶつかったのだ。

「前を見て歩けやこの豆ガキ」

喋り方からみてどうやらこの男性はお世辞にもいい人とは言えなさ  
そうだ。

それに対するエドワードはというと、

「ああん？テメエこそ前を向いて歩いてればぶつかることは回避で  
きたと思わねえかコラ、っーかお前何処の誰がハイパーミジンコマ

イクロ豆粒ドチビだつんだよゴルア」

「————同レベルだ。

ちなみに怒りの原因は八割方後半の台詞だろう。

今にも始まりそうな喧嘩を阻止せんと集まる善良な人々4割対喧嘩を楽しみに集まりはやし立てる人々6割という微妙な比率が保たれ始めた頃、一人の少女が喧嘩を始める気マンマンの二人に罵声を浴びせる。

「邪魔なんだからどけよオイ、その腕一生使い物にならなくしてやろうか野蛮人」

それはおおそ少女とは思えない口調で。

だが、その時その場にいた誰もが同じようなことを考えていた。彼女は黙ってさえすれば誰もが見ほれてしまうだろうと。

少女らしいしなやかな線の細い輪郭、黒インクを流したような一重瞼の目、少し黄みを帯びた白い肌は彼女が東の国から来たのを物語っている。

口調と態度もそうだが何よりも人々の目を奪ったのは彼女の服装と髪型だ。

眸の色と同じ漆黒の長髪を後頭部真ん中で楓の若葉色の細帯を幾度も位置をずらして巻き、それを結んだある種のポニーテール。

東は東でもシン国の遙か向こう、極東の海に浮かぶ島国の正装の帯を逆向きにして着こなしているのだがそちらの方がむしろ彼女には似合っているのが分かる。

そしてその腰にだらしなくぶら下がる革のベルトには見慣れない形

をした細身の剣。

アメストリスにおいてあまりにも異端な立ち姿にエドワードは喧嘩を忘れ、彼女に見入っていた。

「聞こえなかったか、ああ？退けつつてんだよ！」

「あ、ああ」

ふと我に返りこの少女に罵声の一つや二つでもあびせてやろうと思つたエドワードはだがしかし、あまりのけんまくについ身をひいてしまった。

「師匠に会うため家族にはれないよう屋敷を抜け出しはるばるカウグレ、シン、クセルクスス辺りの砂漠を歩いてとうとうアメストリスにたどり着いたと思えば何だよこの騒ぎ。大通りでの喧嘩は人々に迷惑ですよと教わらなかつたか手前てめえらはよお」

エドワードは目の前の少女に贈る言葉を三つほど思いついた。

『お前ツ！徒歩で二つの国と砂漠をわたつたのかよ！なんちゅー体力だ?!』

『師匠つていったい何の？つか屋敷つてお前ドコのお嬢様だ?』

『うぜえ。黙つてれば完璧だぞお前』

これはきつと彼女のセリフを聞いた人間全てが思いつく言葉であるうとエドワードは軽く確信していたりする。



## 出会い（後書き）

今回は主人公が少しも出ておりません。  
・・・さーせん



「此処は…何処だ？」

と言ってみた。周りに誰もいなければただの独り言で人が来たときにもう一度言い直さなければいけないさそうな羞恥心に近い物を覚悟で言ってみたのだが幸い寝具の隣にあるイスに少年が座っていた。

「ここらで一番組段と部屋が優しそうな宿だ」

なるほど、私は倒れた後此処に運ばれたんだな。

「んで取りあえず聞くけど、お前は誰？つか何者？」

「リンデイス・ラファイエル…」

「…そら本名じゃねえだろ？まあこつちもわざわざ問いただして本名を聞きだそうとするほど野暮でもねえけどよ」

「何故そういえるんだ？」

「お前は何処の誰がどう見ても東洋人だ、そいつの名前がこんな西洋風では無いはずだっつー憶測よ、間違ってたらごめんな」

「ん、まあとりあえずありがとな」

この少年はよく見ると背は低いが私と同一年ぐらいだ。

金髪に金色の小憎たらしいつり目、服の皺のつき具合で分かる機械の左足と右腕。将来なかなかの色男になりそうだがこの手足と少年にしてはあまりにもがっしりとした体格から見ると、とてもじゃないが安穩とした人生を送ってきたわけではなさそうだ。

それに弟を自称する鎧男は足音が内部でもの凄く反響しているところから確実に空洞だろう。

「悪いが私にも少し質問をさせてくれ。・・・お前達は何者だ？」

「・・・君は、この国が軍事国家だということを知っている？」

背の低い兄にかわってがらんだこの鎧が私の質問に答えた。

「ああ」

「この国の軍には国家錬金術師制度というモノが存在してて、国内で有能な錬金術師は軍による審査を受けて合格すればふたつ名、安定した高額収入、様々な場所に入る許可と軍の少佐相当地位を手に入れることができるんだよ」

「でもソレって結局は軍の配下につくって事だよな？私はイヤだな  
そういうの」

私が顔をしかめたのを見て弟がふさぎ込むと（かぎりなく）そう見えた”程度の憶測だ）兄がその反応はもう見飽きたとも言わんばかりの表情で口を開いた。

「・・・そんでもって晴れて国家錬金術師になった名誉ある錬金術師はみーんなコイツを持ってるんだ」

そうやって彼がズボンのポケットから出したのは六芒星と龍のような刻印の入った丸い銀時計。

## 不運な巡り合わせ（前書き）

今回は主人公の視点で語られています。

主人公は謎が無駄に多いのですが、その辺はまあスルーで

## 不運な巡り合わせ

アメストリスの東の方で野菜の値段が安くなっているという噂を聞いてイーストシティーを訪ねてみることにした。

徒労だったとしても気にしない、なにせ私の旅に目的なんて無いのだから。

「安いよ安いよー！ウチのトマトは50セنز、ニンジンも80、タマネギに至っては48セنزだ！」

活気づく市場の売り声が聞こえる。トマトは50セنزか、コレは買いだな。

「トマト五つ！」

「あいよ、おねえさん。250セنز確かにもらったよ」

「どうも」

「・・・なあちよいとまってくれ」

いきなり市場のおじさんに呼び止められる。正直吃驚して何かが背筋を走るような気がした。

「何ですかー？」

「いやーちよいとね。おねえさん名前は…なんてんだ？」

「いやだなーどうしたんですかいきなり」

「物凄く東洋風な女の子がリンデイス・フィオレっていう人を探しているんだけど…」

「っ！」

そんな…まさかあの子を？あの莫迦私を追っかけて危険な目に…

「いやあ、あの別にそんな…ただその子が言っていた人相に似ているから…だからその…そんな怖い顔しないでくれ、な？」

驚愕の色を帯びた市場の男の表情が私にどうか落ち着いてくれとすがる。

瞳孔の開き具合、声色、発汗の様子からして彼はどうやら嘘をついているわけではなさそうだ。

まあ、第一に彼女ほどの剣士がそう簡単にやられるとは思えない。

だがここでもう一つ問題が発生。

あの子がこの町にいるということはとつとと此処を去らなければいけない。

あの子に見つかり、その…いろいろと面倒臭い。

口が悪く、短気で喧嘩っ早い。

そのくせして端麗な容姿がよく人目を引く。

絶対に旅の伴侶にしたいくないタイプだ。

そんなことを考えながら私が買ったトマトを嚙りながら歩いてい

ると、そこはかたなく元気そうな私の頭痛源の声が聞こえた。うん、  
もう死にたい。



師匠発見！（前書き）

視点：リンデイス・ラファイエル

## 師匠発見！

「へえ〜っ、軍の狗という立場を逆に利用してやるのか。やるなあ、お前」

とりあえず対話が成立する相手が居ないと退屈なのでともに行動をしている二人の少年はエルリック兄弟と言ってこの国では名の知れた錬金術師らしい。

歴史上最年少の国家錬金術師だとか。

何でも彼等は幼い頃、死んだ母親を蘇らせようと錬金術師最大の禁忌である人体錬成を行った。

しかし錬成は失敗に終わりエドワードの弟、アルフォンスは肉体を、エドワードは左足を代価として持って行かれた。

そんな状態だというのにエドワードは右腕と引き替えにアルフォンスの魂を引き戻し、大きな鎧に定着させた。

なんていう壮絶な過去がある。

弟の鎧の中身が空っぽなのはそのため。

結局失った自分達の身体を取り戻すために生活を安定させ、民間人よりもラクに研究が出来る国家錬金術師になったというわけらしい。因みに一文で説明できないあたりが面倒くさい。

「お前の師匠の…リンデイスだっけ？」

「ああ、それが？」

聞き返すとエドワードはおもむろに市場の一角を指さした。

「アレじゃねえの？」

そこで目にした人物を大声で呼ぶと、簡抜いれずにそこに向かって走り出した。

「師iiiiiiiiii匠oooooooo!!!」

## 東の少女(前書き)

今回はノリでエド視点です。

キャラが違うーとかそういうところはスルーで

## 東の少女

事の成り行きをかいつまんで説明いたしますと、アルまでもがいつものことと投げ出していた俺の町中喧嘩を（自分が短気であるというのは自覚しているつもりだがどうにもならない）只今現在規則正しい寝息を上げる目の前の少女は誰もが予想せぬ一手にて止めた。おとなしそうな東洋美人の口から出てきたのは暴言ばかりだったが…その東洋美人さんが過労でぶっ倒れたのを善良な通行人Aらしく介抱するのがオレです、貴方の町の錬金術師のエドワード・エルリツクです。

…すみません嘘です提案者は弟ですー的な？

しかしまあよくよく観察してみると肌が結構白い。砂漠を横断する際に上着着ていたせいかな手首から先だけは小麦色をしている。

何の混じりけも脂っ気もない黒髪には清楚な印象を受けた。ここに運んでくるときはつい自分が運んでも良いのだろうかと怖じ気づいてしまうほど彼女は美しい。

俺自身面喰いなつもりはないがそれでもこの少女を凝視するとつい頬を染めてしまう。

適当に毛布を掛けたせいかな彼女の艶やか、いや艶やかな白い脚が濃い色をした毛布の演出する素ん晴らしいコントラストでよく映える。目を背けながらそっと毛布を掛けて一言。

お前、そんなに無防備で大丈夫か？どうなっても知らないぞ。

「此処は…何処だ？」

おきまりの台詞を言って起き上がった少女に少し感謝。

平静を装って彼女の質問に答え、次におきまりの質問で返す。

「んで取りあえず聞くけど、お前は誰？つか何者？」

彼女が答えた名前は明らかに偽名。

でも別にだからといって他人のことに詮索を入れるのは好きじゃない。

その後リンディスと会話をしていると幾つか彼女について分かってきた。

一つ、彼女は剣術の師匠を追ってここまで来たこと。

極東の国の良い身分の家の娘だということ。

最後、コレ重要。試験にだって出してやる。

「……………彼女が手の付け所のないじゃじゃ馬姫さんだということ。」

だがリンディスって…どこかで聞いた名前なんだよなあ。

## 少年の目は、じまかされない

「エドワード・エルリックとアルフォンス・エルリックねえ…どこで知り合ったのよ、ストリートファイト？」

私に会うために二つの国と砂漠を越えてやってきた少女を追い返すわけにも行かず、仕方がないからと一緒に市場を歩く。それでもやっぱり後ろの若い三人組に集まる視線が痛くて仕方がない。

一人鎧だし。

「りん、アンタ本当に私のことを追いかけてきたんですね…」

「勿論。お師匠様は私を疑っておられたのですか？」

「いや、アンタはたとえ槍が降ろうが私のことを地の果てまで追いかけて回すだろうと察しはしているわ…」

そのままりんの旅の土産話を聞きながら歩いていると、視界の端に赤い果実を発見した。

そういえばりんはこれが大好物だったな。

りんの祖国では手に入らない果実で、他国から買っていたそうだがそれでもこの果実を口にすることが出来るのは彼女のような高い身分の人間に限られていたそうだ。

幸いここではそう高くない、買ってやるか。

「お嬢ちゃん、その林檎六つ頂戴」

360セنزを渡して紙袋いっぱい林檎を受け取る。

「りん、これはアンタの好物でしたよね？」

トマトの入った紙袋を小脇に抱え、林檎がいっぱいに入った紙袋を  
りに渡すと彼女は驚喜して紙袋を受け取り深々と頭を下げた。

「これはこれは…誠に痛み入ります、師匠！」

「気にしないで頂戴。ここではジャポネほど値が張る物でもないの  
ですから」

と返して頭を撫でてやるとほのかに頬を染め、年相応のかわいらし  
さを見せてくれた。

いつもそうしていれば良い物を…勿体ない。

「時にエドワード・エルリック。貴方は何処でこの子を拾ってくれ  
たのでしょうか？大変だったでしょう、お怪我などはありませんか  
？りんは手負いの虎とさして変わりませんから…」

「師匠！それはいくら何でも酷いと思います！私は彼が始めようと  
していた喧嘩を止めに入っただけです！それによく考えてみて下さ  
い、もし私が彼等に牙をむいたとしたら怪我どころでは済ませ…  
あ」

「それが本当であれば今頃私はアンタを締め上げているわね」

Side りん



私の国では人は視線で人を殺せると言うが、今の師匠は正にソレだった。

なら私は先ほど師匠に刺殺されたに等しい。

「よく言うぜ、疲労でぶっ倒れて介抱されたくせによ」

「そうでしたか。なら尚のことお礼をしなければなりませんね」

「いえ、いいんです！その場で倒れている人がいれば当然の判断ですから！」

エドワードの弟の魂を定着させている鎧が立てた両手の平を前に出して左右に振り、礼はいらないとアピールする。

彼の名前は確かアルフォンスだったか。

兄とは殆ど正反対の性格で、鎧でさえなければ人当たりの良い好青年だ。

「あら、そうですか。ならこれ以上礼をさせて欲しいというのも失礼ですね」

市場を通り抜け暫く歩いていると、唐突にエドワードが師匠に質問した。

「あなた…何を幾つ持ってた…？」

先ほどまで気疲れしていた表情を塗り固めていた師匠の笑顔が凍り付く。

## 最強の女(前書き)

前回に続き弟子スタートです

## 最強の女

先ほどまで気疲れしていた表情を塗り固めていた師匠の笑顔が凍り付く。

「兄さん…？何を言ってるの？この人はどう見たってトマトの紙袋しか持っていないよ」

そう、傍目からみれば師匠は殆ど手ぶらだ。

師匠の“それ”に気づくとは…

エドワードはかなりの場数を踏んでいると見える。

「何のことかしら、私はポケットにちょっとのお金とトマトの紙袋しか持ち歩いてなんかいないわ」

師匠の目がエドワードの瞳をまっすぐに見据える。

口元は笑顔のままだったが目は完全に笑っていない。

「とぼけないでくれ。その切れ目の入った長いスカートが殆ど揺れないなんて事はある得ない。それに腕の動かし方一つとっても変だ。肘を曲げる角度が極端すぎる。袖には鋭利な刃物でも入ってるのか」

師匠は暫くトマトの紙袋に強く指を食い込ませていたが、直ぐにそこからトマトを一つ取り出し齧り始めた。

「どうなんだよ！リンデイス・フィオレさんよお！」

「良い観察力をしているじゃない。ソレが正解かどうかは別にして、私ともう少し若かったら惚れてしまっていたかもしれないわ」

そう言って師匠はにこやかにほほえんだまま再びトマトにかぶりつく。

師匠は、全くと言って良いほど動揺を見せなかった。

Side Edward

リンデイス・フィオレは俺が軍の司令部にいたときに聞いた名前  
で、裏ではよくしれた“最強”なんだとか。

でも知られているのは戦いがとても強いというだけで何の使い手だ  
とかそういう詳細が<sup>ディテール</sup>あやふやだ。

あるところでは最強の剣の使い手だとか重火器を扱わせたら右に出  
る物はないとか素手なら誰にも負けないなどとまとまった情報がな  
い。

今回初めて彼女に会ってみて、その強さが何の分野であるか垣間見  
えるだけでも十分な収穫と言えよう。

ここで省いてはいけないのが彼女の出で立ちだ。弟子の方のリン  
デイスは前髪で右目を隠していると言っていたが、これはどちらか  
というと顔面の八割を髪の毛が覆っている。

真正面から彼女の顔を見た場合、見えるのは左目と鼻先から下だけ  
だ。

先ほど俺はリンディスのはいているものを普通に言えばスリットと表現するべきところを切れ目の入った長いスカートと称したが、これはあながち間違いではない。

切れ目があからさまに無骨なのだ。

所々ほつれ糸が見えている。

スリットというのははじめからそうなっているモノなのでほつれ糸が見えるはずなど無い。

因みに俺は最初彼女の着ている藤色のワイシャツの袖を不自然に見ていたが、よく観察してみるともう殆どの部分にとんでもないモノを仕込んでいるようにしか見えない。

ーーーーー最後に付け足すとすれば、彼女は俺が今までであった人間の中で物腰といい口調や態度といい、誰よりも女性的な女性であるということくらいか。

私が誰で何者だなんてどうでもいいじゃないの！(前書き)

今回は主人公視点です。

私が誰で何者だなんてどうでもいいじゃないの！

こんな少年に見抜かれてしまうとは、私の暗器術も落ちたな…

「こつなつちまったからには直接聞かせてもらうが、あんた何者だ？」

確かにそれを見抜いた人間、私のことを中途半端に知っている人間は真つ先にその言葉を口にする。

でもわざわざ親切に答えてやる道理なんて無いし、軍の人間なら尚更だ。

「君の想像にお任せするよ」

そしてこの言葉が私のお約束の返し。

何が楽しくて人の素性だのを掘り起こしたいのか全然分からない。嫌な生き物だ、人間というのは。

「師匠が彼等の前で私をりんと呼ぶものですからもうリンデイスと呼んではくれなくなつたではないですか！私に名前を次がせてくれたのなら…」

「あら、なら私のことはフィオレとでも呼んでもらいたいわね」

「ああ、名前が同じなのつて継いだからなんだ！」

「クスツ、そこは彼女が私を師匠と呼んでいる時点で気づいて欲しかったわ」

この空つぼの鎧が弟のアルフォンス・エルリックだそうだ。彼は魂だけを鎧に定着させているらしいが私が思うにそれは結構不便だろう。

肉体がないなら疲労がない、つまり睡眠の必要がないということ。だとすれば彼は幾つ一人の夜を過ごしたのだろうか。

私はそんな想像なんてしたくもない。

私は一時も一人になれた事なんて無いし、むしろ“それ”に苛まれているくらいだ。

でもそれは私にとって無くてはならない存在、忘却の淵に棄てられてしまうことがないよう“それ”は私の罪をしつこいくらい念押ししてくれる。

「あの一、聞いて良いことも分からないんですが…」

「何？スリーサイズは教えないわよ、アルフォンス君」

「いやいやいやいや、そんなこと聞きませんって！えっと、リンデイスの本名って何なんですか？貴方と

混同させないためにも知っておきたいんですが…」

「いいわ、でも余計こんがらがるかもしれないわよ？彼女の祖国の文字はどちらかというとシン語に近いから」

「っし、師匠！勝手に人の個人情報を教えないで下さいよッ」

「驚？ 琳と書いてさざり りんと読むのよ」

「うわぁ…僕達の知り合いにもリンという人がいるのでやっぱり余計混同しちゃいました…」



「…イーグレット」

唐突に口を開いたエドワードの言葉に一瞬、私は動揺を隠せなかった。

「っへ？何、エドワード君？」

「いや、俺少し前にシン国の知り合いにシン語を習ったことがあつてさ。この字は驚おどろって意味だろ？あだ名をつけるならやっぱり白鷺イーグレットかと思って」

そうか、否そうだよな。彼等が私のことを知り得るなんて事は無いはずなんだ。

「……………絶対に…絶対に。」

私が誰で何者だなんてどうでもいいじゃないの！（後書き）

主人公さん…一体アンタ何をしたんですかい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3601x/>

---

消えない十六年の傷

2011年11月22日04時02分発行